

報告 1 桜井万里子（東京大学名誉教授）

Mariko, SAKURAI (Professor Emerita, The University of Tokyo)

「デルヴェニ・パピルスの歴史的背景—第 6 コラムの解読を中心に」

“The Derveni Papyrus and its Historical Background : Reading of Column VI”

1962 年テッサロニキの北西に位置するデルヴェニで発見された墳墓群の一つ（墳墓 A）から多数の副葬品とともに、焼け焦げた卷子本が出土した。つい最近ユネスコの世界記憶遺産として登録されたこのパピルスの卷子は、「ヨーロッパ最古の書籍」と謳われているが、テキストの内容は、オリエントとの関係を伝えている。

パピルスの炭化は甚だしく、復元、解読が困難を極めたであろうことは、容易に推測でき、事実、その校訂テキスト (T.Kouremenos, G.M.Parassoglou and K.Tsantsanoglou, *The Derveni Papyrus*, Firenze, 2006 (以後 EP) が刊行されたのは、発見から 40 年以上も後の 2006 年だった。しかも、多数の未読の断片も残っているところから、EP とは異なる読み方が可能であり、実際にその試みは、ハーヴァード大学の The Center for Hellenic Studies で鋭意つづけられている。本報告では、magoi や mystai という語が読み取れる第 6 コラムについて、EP と F.Ferrari による校訂テキストを比較しながら、第 VI コラムの読解と意義の考察を試みる。

報告 2 佐藤昇（神戸大学准教授）

Noboru, SATO (Associate Professor, Kobe University)

「古典期アテナイにおける養子縁組：家産変動への影響とイエの継続をめぐる」

“Adoptions, Family Properties, and ‘Continuation’ of *Oikos* in Classical Athens”

C.A. Cox, *Household Interests. Property, Marriage Strategies, and Family Dynamics in Ancient Athens*, Princeton, 1998 は、古典期アテナイの家族に関わる広範な資料を渉猟・分析し、イエの継続に関わる様々な実情、とりわけ、家の構成員、家産について、その動的な側面を明らかにした。こうしたダイナミズムをもたらす要因の一つに、彼女は、養子縁組を挙げている。たしかに、他家から子供を迎える養子縁組は、家族構成に変容をもたらすだろう。しかし、養子縁組が、とりわけ家産の通時的変化に影響を与えたとする議論は、養子縁組をしない場合の家産状況と比較して検討する必要があるだろう。本報告では、まずこの点を踏まえ、養子縁組と家産変動の関係を再検討し、Cox 説に疑義を呈する。さらに、遺産相続をめぐる裁判の状況、法

延で用いられた言説から、養子縁組というものがアテナイ社会に対して有していた意義を、とりわけ「イエの継続」イデオロギーという観点から再考する。

報告 3、長田年弘（筑波大学教授）

Toshihiro, OSADA (Professor, The University of Tsukuba)

「パルテノン・フリーズと受益者の表現」

“The Parthenon Frieze: Representation of Dedicator and Beneficiary”

パルテノン神殿付属フリーズ浮彫の構図は、要約すると、崇拜者が犠牲獣と器具を持参して行列を作り、前方の神々に対して歩み寄る様子が表されているとすることができる。古代ギリシア美術において、こうした構図は、奉納浮彫のそれに最も類似している。一般に、奉納浮彫における家族などの「崇拜者」像は、「奉納者」に加えて、奉納行為の見返りとしての神々の favor の「受益者」をディスプレイする役割を果たしていたと考えられる。浮彫は、(銘ではなく) 図像によって、神の加護を受けるべき「受益者」として、奉納者の配偶者と子供たちを明示する役割を果たしたと考えられる。奉納浮彫という形式は、受益者が多数にわたり曖昧になるのを避けるために、加護を受ける構成員を明瞭にするためであったと考えられる。この発表は、PF のデザインが、パナテナイア行列の特定の構成員を「奉納者」と「受領者」としてディスプレイすることを意図していた可能性について論じる。

報告 4、周藤芳幸（名古屋大学教授）

Yoshiyuki, SUTO (Professor, Nagoya University)

「アンフォラとヘレニズム時代のワイン交易」

“Amphora and Wine Trade in the Hellenistic World: A View from Egypt”

ヘレニズム時代には、エジプトをはじめとする各地の遺跡からロドス産やクニドス産のアンフォラが膨大に出土しており、それらは当時ワイン交易が活発に行われていたことの証拠とみなされてきている。一方で、近年の研究は、同時代のエジプト領域部ではワインが盛んに生産されていたことを明らかにしており、ワイン交易の活性化が単なる需給関係によって引き起こされたものではなかった可能性を示唆している。そこで、本報告ではエジプトの諸遺跡におけるアンフォラの出土状況を確認しつつ、この時代のワイン交易の性格について検討してみたい。